

みずちちどうほうかくろく

蛟堂報復録  
8

鈴木麻純

Amatsuki



地獄の沙汰も金次第——

業を背負う覚悟と金があるのなら——  
その恨み、蛟堂に預けてみませんか？  
悪いようには致しません。

「一週間以内に、」

——必ずや片を付けてみせましょう。

蛟堂店主 三輪辰史

目次

第一話

殺生石せつしやうせき

7

第二話

歌う骨

185

第一話

殺生石せつしようせき

少年は夢を見る。

その世界が自分の一部として存在するようになったのは、一体いつのことだったか。彼女ことは生まれたときから知っているような気もするし、そうではなく——逆に、つい最近出会ったばかりのような気もする。まるで知らないうちに芽生えていた自我のように、それは気付けば傍らにあってた。

夜ごと現れるもう一つの現実。

そう、現実だ。

ただの夢ではなく。錯覚でもなく。誰も知らない、自分だけが知る現実——そうあって欲しいと、少年は熱望した。夢の中の光景に、どうしてもか魅了されて止まらなかった。

箱を思わせる狭くて四角い部屋は、もう目を瞑らなくても思い出すことができた。

カーペットの一つも敷かれていない、寒々としたフローリングの床。鉄格子を思わせるフレーム

の付いた銀色のベッド。最低限の物だけが備えられた部屋は、シンプルというには殺風景過ぎた。

そんな部屋で、彼女はいつでも一人だった。壁を背に膝を抱えて、蹲っていた。

大人びてはいるが、大人ではない。どこか危うげな雰囲気を持つ女。彼女は綺麗でもあった。月並みな言葉ではあるが——青ざめて見える白い顔も、混じりけのない闇色の髪も、悲しく歪んだ赤い瞳も。頬を伝う透明な涙さえ、美しく見える。

それらの激しくも調和の取れた色合いに、目を奪われる。そのたびに少年の胸は震えた。

彼女はいつも泣いていた。

「どうして……」

どうして、泣いているの？

何度、そう訊ねたことだろう。何度、慰めようと手を伸ばしたことだろう。

「なにが悲しいの？」

「泣かないで」

狭い世界に響くのは、小さな嗚咽と少年の声。慰めも問いかけも、壁に反射して自らに返ってくるだけだった。触れようとした手は、すると彼女の体をすり抜けた。なにも掴むことのできなかつた手を握りしめ——

「ぼくも……」

同じだよ、と。

届くことのなかった声を、それでも絞って語りかける。

「ぼくも、寂しい。御祖父様はいつも家に居てくれるわけじゃないし、初子姉さまだって、そうだ。父さまも、母さまも、卯月姉さまも、ぼくのことを嫌いだ。秋寅兄さまはよく分らない。丹塗矢の家の丑雄従兄さまは、すごく恐い。ぼくたちは、同じ。あなただけじゃないから。だから……」

じっと彼女を見つめていると、世界で二人だけになってしまった気になった。悲しいような、けれどほんの少しだけ嬉しいような心地で、少年は続ける。

「だから泣かないで。ぼくがいるから。お願いだから——」

ぼくを見て。ぼくに気付いて。

熱っぽく訴える。彼女を慰めたいのか、それとも慰められたいのか。両手で目元を拭って、吐息をもらす。いいや。いいや。そんな単純な話ではないのだ。少年は滲む視界に彼女の姿を捉えながら、切望した。

(ああ、どうか。彼女の世界にも、ぼくという存在が認められますように)

彼女にも、この場所で嘆く自分を知って欲しいのだ。この場所で泣く彼女を、自分だけが知るように。寂しさを共有したいのだ。自分たちの他は誰も知らない、狭い夢の中で。

彼女さえ一人ではないと気付いてくれたのなら、手を取り合うこともできるようになるのではないかと思えた。それは予感というより、願いだったのかもしれない。期待と微かな不安が入り混じった瞳で、少年は彼女を見つめた。その時間をどれだけ長く感じたことか。

ややあつて、彼女はほんの少しだけ顔を上げる——目覚めるのは、決まってその瞬間だった。あと少しで視線が交わりそうなタイミングで、ふっと意識が引き戻される。

そうして目を覚ました世界に、彼女の姿はない。どこにもない。どうしようもないもどかしさと切なさに胸を焼かれながら、兄が起こしに来るまで天井を見つめ続けた。

少年の名は、辰史。

「辰ちゃん、どうしたの？ 箸、進んでないみたいだけど。食欲ない？」

思考を割って聞こえてきたのは、腹立たしくなるほど脳天気な声だった。大切な庭を踏み荒らされたような、そんな心地で眉を顰める。それでも——辰史は仕方なしに二、三度目を瞬かせて、声の方へ意識を傾けた。少し広めのダイニングテーブル。正面に座っているのは兄だった。

三輪秋寅。

三輪家の長男である。とはいえ辰史と六つしか違わない彼も、この春中学に上がったばかりで、まだ十分に子供と呼べる年頃だった。多忙な祖父や両親に代わって家のことを任されているせい、妙に目敏いところがある。今も——

「大丈夫？ さつきから……っていうか、このところずっと上の空みたいだけど。最近朝もなかなか起きて来ないし。もしかして、具合でも悪かったりする？」

心配そうに訊いてくる。そんな兄のこまやかさが、辰史は少しだけ苦手だった。小さく縮こまり

ながら、上目遣いに彼を見る。細い眉の下にある瞳は、いつも人懐っこく笑っているが、一方どこか卑屈なようにも見えた。彼が首を傾げると、父譲りの細い猫っ毛が揺れる。そんな兄の顔を眺めながら——どう答えるべきか迷った末に、辰史は小さく首を振った。

「大丈夫です。秋寅兄さま」

「もし具合が悪いなら、我慢は良くないよ」

「我慢なんて……」

「実は重い病気だったってこともあるかもしれないからさ。たっちゃんのとときだって急だったし」言つて声を潜めたのは、こちらの表情に気付いたからなのだろう。たっちゃん。丹塗矢辰季。辰史が生まれる前に死んだという従兄の名前だ。辰史は、彼の話題が嫌いだった。

病死だったと聞いているが、周囲は辰季の早すぎる死を受け入れられずにいるらしい。

「たっちゃんは好かれていたのよ。私も、兄さまも、丑雄従兄さまも……勿論、御祖父様も。みんなたっちゃんのが好きだった。神さまからも愛されて、連れて行かれちゃったんだわ」

みんなが口を閉ざしがちな辰季のことを教えてくれたのは、姉の卯月だった。それも親切からではなく、なにか意地の悪い意図があったのだろうと思えてしまう。

いや、卯月だけではない。なんとなく余所余所しい両親の態度も気に掛かっていた。

口ではなにも言わないが、ぎこちない顔をする父。そんな父のぎこちなさを取り繕おうとしてくれるが、やはりどこことなく遠慮がちに接してくる母。

また、辰季の兄である丑雄——丹塗矢家の長男から嫌われていることも、感じないではなかった。

従兄の鋭い視線に気付くたび、辰史は酷く息苦しい思いをしなければならなかった。まるで人殺しと責められているように錯覚して、畏縮せずにはいられなかった。

さらに、無遠慮で無神経な親戚も、しばしば辰史と辰季を比較した。面と向かって死んだ少年の名前を口に出すことはなかったが、彼らの視線はいつでもこちらではないどこかを見ているように思えた。

——みんな、辰季の方が良かったのだろう。自分ではなく。

そう考えると、目の前で心配そうな顔をしている兄のことも信じられなくなった。優しかった一番上の姉は、何年も前に家を出てしまった。

祖父だけだ。今は祖父だけが唯一、自分を大切にしてくれる。もつとも、すべての元凶である辰史という名は、その祖父から与えられたものではあったが。

逃げ場のない絶望に、唇を噛む。どうして自分ばかりが、こんな思いをしなければならぬのか。「たっちゃんが死んで、辰の字をもらった。あんたはそのおかげで、私や兄さまよりも優れているんだから。恨みを買うのは仕方がないことなのよ。だって、努力してないんだもの」

そう言ったのも、卯月だった。彼女の言葉を思い出して、辰史は胸の内を独りごちる。

（ぼくが、自分で選んだわけじゃないのに……）

優れている。だから、どうだと言うのだろう。いつ、誰が、そうなることを望んだと言うのだ。

他人と一線を画すことがどんなに恐いか、姉は知っているのか？

自分でも把握できないほどの力を持つというのは、つまりいつ爆発するとも分からない爆弾を体の内に抱えているようなものだった。羽目を外すことも、癩癩かんしゃくを起こすことも躊躇ためらつてしまうほどの恐怖を知らないから、彼女はそんな冷たい物言いができるのだ。

姉さまは理不尽だ。辰史は口の中で呟つぶやいた。

自分はいつだって、他人を傷付けないための努力をしている。息を潜めて、感情を抑えて。少しでも早くこの力を自分のものにできるよう、祖父の教えに従っている。

(それを知りもしないくせに、勝手なことばかり……)

いつまで、こんな日が続くのだろうか？ いつまで我慢すれば、みんなが羨む“特別”の恩恵を受けることができるのだろうか？ 本当に、祖父のような異能者になれる日が来るのだろうか？

現実存在する様々な人を、そして自分の未来を、疑うにつれて思い出すのは、やはり夢の中の女のことだった。彼女なら、なにかも黙って聞いてくれるような気がした。疑問も、寂しさも、辛さも。

あの部屋で、いつものように膝を抱えて。こちらの話をすべて聞き終えた後で、やはりなにも言わずに抱き締めてくれるのではないか——それは、たった一つの希望だった。現実に疲れた子供の甘い、甘い夢だった。

(ぼくだけの夢だ。ぼくだけの)

呪文を唱えるように、口の中で反復する。思考の間も、兄の声はずっと続いていた。けれど、それは外から聞こえてくる風の音より遠かった。耳を傾けたところで意味がない言葉のようにも思えた。

「とにかく、無理しちゃ駄目だよってことで。病院、行ってみる？ 学校にはお兄ちゃんが連絡してあげるからさ。なにか悩みがあるなら聞かし。辰ちゃん、なんでも我慢しがちだから……」

「そんな言葉で辰季の話題を濁す彼を遮って、

「夢を、見るんです」  
と、おもむろに打ち明けたのは、酷く腹立たしくなったからだ。なにかも分かっているという顔で喋り続けるこの兄を、困らせてやりたくなくなった。案の定、秋寅は不意を突かれたように目を瞬かせた。

「夢？ 夢って、あの？ 夜に見る？」

訊き返してくる兄に、頷く。

「女の人が——」

「学校の先生？」

「そうじゃなくて、もつと……」

もつと、なんなのだろう。

悲しい？ 寂しい？ いくつかの単語を思い浮かべて、辰史は小さく首を振った。彼女の本質を



言葉にすることは躊躇われた。それらを口にした瞬間に、夢は永遠に夢として手の中から零れてしまふような——そんな恐ろしい予感があった。代わりに、

「綺麗なんです。とても」

ほうっと溜息交じりに呟く。これにも、兄は面食らったようだった。

「綺麗？」

その単語を確かめるように繰り返してくる。

「はい」と、辰史は即答した。

「もしかして……辰ちゃんてば、その女の人のことを好きになっちゃったの？ 病気は病気でも、恋の病ってやつ？ でも、ちょっと早すぎないかなあ？」

苦笑した秋寅。恋の病という不可解な言葉に、辰史は眉を顰める。兄の顔を眺めながら、意味を考え——そして気付いた。兄は勘違いしているのだ。勘違いしたまま、喋り続けている。

「まあ、あれだよ。辰ちゃんは寂しかったんだよね？ このところずっと御祖父様も忙しそうだし、初子姉さんからの連絡もない。卯月は……まだお姉ちゃんとしての自覚がないからなあ。お兄ちゃんが悪かったよ。もっと、辰ちゃんのことを気に掛けてあげないといけなかった」

眉を下げて、ごめんねと謝ってくる。そんな兄は、きつと家族の誰より優しいのだろう。けれど——醒めた心地で、辰史は口を開いた。

「兄さまは、下品だ」

言った後で少しだけ、本当に少しだけ胸がちくりと痛んだが、それでも言わずにはいられなかった。彼女に縋りたくなるこの気持ちを、慰めたいこの衝動を、恋の病などという不可解な妄想で片付けられてしまいたくはないのだ。何故なら、彼女は——

（なんだっけ、御祖父様が言ってた。好きとか、嫌いとか。そんな簡単な言葉じゃなくて……）

考える。祖父が祖母との関係を語るのによく使う言葉。ただ一つの単語。それほど難しいものはなかったはずなのに、頭に血が上っているせいか思い出すことができない。

「げ、下品？」

傷付いたというよりは、驚いたのだろう。声を引き攣らせる兄から目を逸らして、

「……ごちそうさまでした」

と、言うのと、辰史は立ち上がった。

「あ、ちょっと。辰ちゃん、まだご飯残って——」

「いらぬ。学校、行ってきます」

声を振り払って、背を向ける。後ろで兄はまだなにかを言っているようだったが、その声はもう耳に入ってこなかった。部屋へ戻る途中で卯月からも呼び止められたが、やはり無視して傍を通りすぎた。誰とも話したくなかった。誰と話しても無駄だと思えた。

（……ううん。御祖父様なら、分かってくれるかもしれない）

障子をぴつたりと閉めて、溜息を吐き出す。

そのままずるとしやがみ込んで。目を閉じれば、目蓋の裏では彼女の赤が。いつまでも、まるで暗闇を照らす炎のようにゆらゆらと揺らめいていた。

三輪辰史は夢を見る。

名前も知らない彼女という存在を、言葉で説明するのは難しい。

哀しげな女性。蹲った女性。孤独な女性——そうありのままに表現してしまうのは、あまりに素っ気ないような気がした。かといって、なにより特徴的なその赤い目のことに触れようとは思えなかった。結局のところ「夢の中の彼女」と呼ぶのが無難で、そしてほんの少しだけロマンチックにも思えた。

人とは違うから、こうして一人でいるのだろう。彼女も。

やはり自分と同じなのだ。いつものように蹲っている女の目を見つめながら、辰史は小さく呟いた。なにがその色を作り出しているのか。血よりも赤く鮮やかな赤の瞳は美しい。が、人間的ではない。

「あなたも、誰かに苛められたの？」

或いは責められたのか——

問いかけに、返事はなかった。これもいつも通りのことだ。なにかしらの反応を期待していたわ

けではなかったが、それでも落胆せずにはいらなかった。朝の一件が、辰史の胸の内に暗い影を落とっていた。

もしかしたら、すべては思い過ごしだったのではないか。彼女と触れ合う日も、言葉を交わす日も、この先永遠に訪れることはないのかもしれない。思わずそう疑ってしまって、小さく首を振る。

そんなことはない。ないはずだ。彼女は——

「ぼくの……」

口を開いて、言葉に詰まる。彼女への想いを決定的にするはずの、その一言がどうしても出て来なかった。途方に暮れた面持ちで、けれどそのまま諦めてしまう気にはなれずに、辰史は女の正面へ這い寄った。赤面したくなるほどの距離で、彼女の顔を覗き込む。悲しい瞳に映るのは、今にも泣き出してしまいそうな少年の顔だった。それを認めた瞬間に、辰史は不安に引き結んでいた唇を少しだけ緩めた。

（大丈夫だ。大丈夫。ぼくは、ここにいる。ちゃんと、彼女の目に映ってる）

些細な確認だった。それだけのことで、体中に安堵が広がった。どうして、今までこうやって自分から彼女の視界に入ろうとしなかったのか——ただ、待ち続けているだけだったのか。不思議に思いながら、辰史は飽きることなく彼女の顔を見つめ続けた。その目に映る自分の姿が、彼女と自分との世界を繋いでいる唯一の証だった。

「ねえ——」

いつの日か、この声も彼女の耳に届く日が来るのだろうか？

「あなたも、ここにいますよ」

彼女の顔を見つめたまま、自分の瞳を指さしてそつと囁く。

「ここにいるから。だから、泣かないで」

懇願する。熱を帯びた息を吐き出しながら、辰史は女の頬のあたりへ触れた。すり抜けてしまわないように、ぎりぎりのところで手を止める。彼女に触れることはできない。しかし、そう見せかけることはできる。目に映る、その姿だけでも。ぬくもりを感じるができなくても。

もしも、なにかの拍子に彼女がこちら側に気付いたとき——目の前にこの光景が存在しているということが、いくらかの慰めにはなるだろう。その瞬間を思い描くと、胸の奥が激しくざわついた。喜びか。緊張か。震えそうになる手に力を込めて、さらに顔を近付ける。

一体、自分は どうしてしまったのか。  
分らない。

辰史は自答して、押し殺していた息を漏らした。当然、その吐息が彼女の前髪を揺らすことはなかった。少年の視線はなだらかな額を滑って、瞳を見つめ、すつと筋の通った鼻梁をなぞり、最後に口元で止まった。彼女の唇は、まるで蕾のように固く結ばれている。酷く寒そうに見えるのは、血の気が失われているからかもしれない。

辰史は彼女の唇を見つめながら、空いた手を自分の唇に這わせた。あたたかい。夢の中で体温を

感じるといのは、まったく不思議な話ではあったが——首を傾げながら、離れた指先を今度は彼女の口元へ伸ばす。なんととはなしに思い出したのは、大好きな童話のことだった。

白雪姫やいばら姫にキスをした王子も、こんな気分だったのだろう。世界を閉ざした姫君にすつかり魅了された彼らは、言葉を交わすこともないうちに、魂を奪われた。そして彼女たちの唇に、触れずにはいられなくなってしまう——

自分がなにをしようとしているのか、自覚して辰史は少なからず動揺した。けれど、思い止まるうとも思わなかった。意を決して、そつと唇を寄せる。と、そのとき。

(……………?)

微かな違和感を覚えて、視線を上げる。ふと、なにかが動いたような気配を感じたのだ。彼女と自分の他は誰もいないはずのこの場所で。

——それは、影だった。不自然な影だった。

正面から強い光を当てられたわけでもないのに、彼女の背後にくつきりと浮かび上がっている。彼女より余程強い意志を持って、そこに存在しているように思えた。影がゆつくりと「目」を瞬かせる。彼女と同じ、赤い目。口が裂けるように開いたときには、もう人の姿をしていなかった。

獣だ。

いや。生きものではない。なにか得体の知れない、化け物だ。

反射的に後退ってしまったから、辰史は「あっ」と小さく声を上げた。彼女はまだそこにいる。

最初からずっと変わらずに、そこで蹲っている。恐る恐る視線を戻す——と。

「……………っ！」

いつの間にか、彼女は顔を上げていた。二つの赤い目が、初めて辰史のことを見つめていた。視線が交わる。交錯する。それは最悪のタイミングだった。辰史は自分の顔からサアツと血の気が引いていくのを感じた。

「ち、違う」

慌てて、首を振る。

「ぼく、そんなつもりじゃ……」

そう弁解しながら動こうとすれば、獣の形をした化け物が低い唸り声を上げた。威嚇の意味はすぐに分かった。彼女に近付くなど、それは言っているのだ。

彼女と獣は同じ赤い瞳で、じつとこちらを見つめてくる。

「あ、あ……」

緊張で心臓がどくと跳ねた。体の奥で煩わしいほど騒いでいる鼓動とは対照的に、体は強張っていた。彼女を恐れたくはないのに。拒絶したくはないのに。動け、と念じてみたところで、指の一本も動かない。そんなこちらの胸の内を見透かしたように、女は小さく頭を振った。

「ぼくは……」

目を見開いたまま、そんな彼女を凝視する。

——どうして。

体が動かないのだろう。

——どうして。

触れるどころか近寄ることさえ躊躇ってしまうのだろう。

これは夢だ。夢だ。夢だ。

何度も自分に言い聞かせる。夢の中で傷付けられたところで、現実に怪我をするわけではないのだ。ほんの少し——痛みとも言えないような一瞬の恐怖に耐えるだけで良い。ただそれだけのことか、どうしてできないのか。

自分では硬直しているとばかり思っていたのだが、無意識に後退していたらしい。背後に壁を感じて、ようやく我に返る。気付けば彼女との間には、二メートルほどの距離ができていた。

女が虚空を見つめる。なにもない空間だけが、彼女を拒絶しない。縋るものを失った目に、もう涙は浮かんでいなかった。悲しみも失望も。すべては通り過ぎて、後には諦めしか残っていなかった。唇から湿った溜息を吐き出して、彼女はゆっくりと膝に顔を埋めた。胎児のように体を丸めて、目を瞑る。瞼の下に、赤い瞳が隠れていく。その様子は、ひっそりと萎れていく花にも似ていた。色を失った世界の中で一人途方に暮れながら、辰史は彼女を見つめ続ける。

壁に張り付いた黒い化け物が、上機嫌に喉を鳴らした。まるでこちらの臆病を嘲笑っている風にも見える。それでも——憤慨するどころか、いつそう体を縮こまらせた自分に、辰史は失望した。

もう「どうしたの」と訊くこともできなかった。できるはずがなかった。

答えは目の前に広がっている。辰史自身が、答えの一部として存在している。二人きりの世界だと、そう錯覚していた自分が彼女を拒絶してしまった。化け物を恐れてしまった。

夢の中でさえ誰からも手を取られることがなく、こうして恐れられる。だから彼女は泣いているのだ。孤独を悲しんでいるのだ。

——ああ、ああ、ああ……！

大声を上げて泣き出してしまいたい衝動を、辰史はどうか堪えた。握りしめた両手がふるぶると震える。情けない自分に対する怒りと、得体の知れない存在を目の前にした恐怖が入り交じって、頭の中が白く染まった。

滲む視界の中で、彼女は蹲っている。

いつものように。けれど、いつもより頑なに。彼女が顔を上げようとしないうちに少しだけほつとしていた自分に気付いて、辰史は唇を噛みしめた。すつと体温が下がっていくような感覚に、寒さを覚えて両肩を抱く——

目を覚ませば、いつも通りの朝だった。

またぼんやりと彼女のことを思い出して、辰史は天井を見上げたままゆっくりと目を瞬かせた。目尻から涙が零れる。どうしようもなく悲しい。

——彼女も同じ朝を迎えているのだろうか。

ふとそんなことを思ってから、自己嫌悪に胸が鬱いだ。布団の中から右手を出して、じつと見つめる。なんにも掴むことができなかった、無力な手だ。どうして怯えてしまったのか。どうして、自分はこんなにも臆病なのか。酷く情けなくなつて、顔を押しさえる。喉の奥からは嗚咽が漏れた。

「ぼくは……」

なんにもできない。なんにも。

「同じだと思つたのに……」

彼女も自分と同じように寂しいのだと。一人なのだ。

「ぼくが、逃げた」

彼女を一人にしてしまった。

言葉にすると、後悔がいつそう重くのしかかつてきた。どうして、どうして、と何度も胸の中で繰り返す——やがて口を噤んだのは、問いかげの無意味さに気付いてしまったからだだった。答えを見つければ、あの化け物を恐がらずに済むというわけでもない。

きっと自分は、また同じことを繰り返してしまう。

夢の中で、どれだけ彼女に触れたいと願つても。同じように化け物を恐れ、そして彼女を遠くから見つめたまま朝を迎えるのだろうか。繰り返す。繰り返す。繰り返す。

延々と続くその光景を思い浮かべて、辰史はひつくと喉を鳴らした。

秘密の夢。夜ごとに見る、もう一つの世界。大切なそれを、他でもない自分の手で壊してしまつた。悪夢に変えてしまつた。泣くことさえ浅ましいような気がして、枕に顔を押し付ける。鼓膜に響いてくる自分のくぐもつた声を聞きながら、辰史は感情のままに叫んだ。それらはすべて、柔らかな布の奥へと吸い込まれていく。

「頻り声を上げて——」

いくら振り絞つても呻き声しか出なくなつたところで、ようやく辰史は顔を上げて布団から這い出した。障子の向こう側から射してくる朝の光が、目に痛い。

「辰ちゃん、起きてる？ ご飯だよ」

部屋の外から、兄が呼んでいる。いつも通り、悩みなどなにないというような明るい声。その中に弟を案じる優しさを感じてしまつて、辰史はまたぼろぼろと涙を零した。

（同じじゃなかった……）

まったく同じではない。目を覚ませばこうして兄から声をかけられる自分と、彼女とでは。

「ご飯、いらない。お兄さま、ごめんなさい。ごめんなさい」

「ちよつと、辰ちゃん？ どうしたの？」

「なんでもない。なんでもないから、入ってこないで！」

悲鳴を上げるように言い返して、膝を抱える。心配してくれる兄に悪いと思わないでもなかつた。が、その優しさを受け入れてしまえば、もう二度と彼女に会えなくなつてしまうような気がした。

（ぼくじゃなにもできないけど……。でも、会えなくなるのは嫌だ。絶対に、嫌だ）

夢に見ることがなくなれば、いつか自分は彼女のことを忘れてしまうだろう。或いは幼い頃に見た夢の一つとして、苦笑とともに思い出すことはありえるのかもしれないが。

（そうしたら、あの人はどうなるんだろう）

ずっと、あのままなのだろうか？ あの狭くて暗い夢の中で、化け物と二人。

（知っているのは、ぼくだけだ。化け物をどうにかできるのも、ぼくだけ）

ぼくだけ。

口の中で呟いて、溜息を吐く。その言葉には魅力を感じたが、やはり化け物が恐ろしかった。恐ろしくて、情けなくて、悲しくて、それでも夢を手放しがたくて——辰史はしばらく、そうして膝を抱えたまま唇を噛んでいた。

障子の向こう側からこちらの様子を窺っていた兄の気配と足音が、静かに離れていく。追いつきたい衝動を堪えていると、やがてなにも聞こえなくなつた。静寂の中に自分の息遣いだけを感じながら、目を瞑ることもできずに、ただ夢の余韻が去るのを待つ。

どれだけの時間そうしていたのだろう。

五分か、十分か。或いは一時間か、もつとか。ふと時間が気になつて視線を上げる。と——

「お、御祖父様……」

滲む視界の真ん中に祖父の姿があつた。三輪尊。家督は辰史の父に譲つたが、今なお三輪家に君

臨し続けている偉大な異能者。一番の庇護者であり、そして「辰史」という名を与えてくれた人でもある。辰史は驚いて——それから思い出したように涙の浮かぶ目元をこすった。

ぴたりと閉じられていたはずの障子は、大きく開いている。彼は、祖父がいつからそこにいたのかまったく分からなかった。目を開けているつもりだったが、無意識に外の情報を遮断してしまっていたらしい。目が合うと、祖父は穏やかに微笑んだ。

「やけに考え込んでいたじゃないか。辰史」

そう言う彼は、本家から遠く離れた土地に店を構えている。今は孫たちを育成することの方が大事だと、受ける依頼の量を抑えていた。しかしそうは言っても、祖父の力を頼ってくる人は多く、多忙の日々を送っていた。いったいどんな仕事をしているのか、一度出かけていけば一週間は戻らない。今回は三日。随分と早い。普段なら、彼の早い帰還を素直に喜んだらう。飛びついて出迎えるくらいのはしてはいたかもしれない。けれど、今日はそんな気分にもなれなかった。

「帰っていたのですか。御祖父様」

祖父の顔をちらつと確認して、すぐに俯く。祖父はそんなこちらの様子を一瞬だけ訝ったようだが、すぐに気を取り直して軽く頷いた。

「ああ。今日は卯月の修練を見てやる約束だったからね。昨日の最終で帰ってきたんだが、お前はもう休んでしまった後だったから——」

「お出迎えできなくてすみません」

「いや。いいんだよ。子供が夜更かしをすることの方が、良くない」

彼は言いながら、こちらに近付いてきて腰を屈めた。そうしたのは、視線を合わせるためだろう。年のわりに皺の少ない手が伸びてくる。骨張った大きな手だ。大好きな祖父の掌だ。髪を梳くように撫でる、その手のあたたかさに、辰史は顔を歪めた。

「そうだ。手を差し伸べるといふのは、慰めるといふのは、こういうことだ。」

（ぼくには、できなかったこと）

悪夢の余韻がまた急速に蘇ってくる。思わず喉を引き攣らせれば、祖父は驚いたようだった。

「おや、おや。いったいなにがあったと言うんだね。お前のお兄さまも心配していたよ」

「なにも……」

「と、いう風には見えないが。私には相談のできないことかね？ ふむ、では——」

「こうしよう」

と、わざとらしく閃いた口ぶりで言った彼が、顔を覗き込み小指を差し出した。

「私も一つだけ、お前に悩みを打ち明ける。お前も一つだけ、私に悩みを打ち明ける。そのことは誰にも言わないと、互いに約束しよう」

「御祖父様の悩み、ですか」

辰史は祖父の小指をまじまじと見つめた。完璧な祖父に悩みがあるとは、思いも寄らないことだっ

た。意外と言うよりは、むしろ疑わしいとさえ思いながらも、おずおずと小指を差し出す。

「教えてください。御祖父様の、悩みから」

小指を絡めて——警戒を解かずに言えば、祖父は少し笑って語り出した。

「私は、一度だけ選択を誤ったことがある」

それは告白だった。灰色がかった冷徹な目は、そのとき確かに過去を眺めていた。辰史は息を呑んで、続く言葉を待った。祖父の骨張った手が、また顎髭を撫でる。それは、彼が言葉を選ぶときの癖だった。間を置いて、彼は言ってきた。

「いや、そもそも本当の意味での選択などしたことがなかったのかもしれない。私の傍には、常に先見の力を持つ彼女がいた。辰史——お前の御祖母様は、こう言って私の前に現れたんだよ」

——私は、お前さまの運命なのです。

静かに吐き出したあとで少しだけにはかんで見せたのは、柄にもなく照れていたからなのだろう。

祖父の台詞を聞いて、辰史ははっと目を開いた。運命。それはずっと思いつくことの出来なかった言葉だった。彼女を——夢の中の女を恐れてしまった今朝、その言葉を聞かされる羽目になることは。辰史は俯いたまま少し肩を震わせると、

「……続けて、御祖父様」

そう彼に先を促した。祖父が頷いて、言の葉を継ぐ。

「その言葉の通り、彼女は私を導いた。私の人生に色を添えてくれた。私はね、お前の御祖母様の

ことが大好きだったんだよ。辰史」

恥ずかしげもない言葉で、祖母への想いを語る。日頃は自分の内面でさえ語ることもない祖父が、人への想いを語るなど珍しいことだった。

「信頼していた。信頼のつもりだった。だが、それは盲信と呼ぶべきものだった。私は自覚していなかった。愚かなことに——彼女の力……未来を覗く力によって運命を変えてきたことを、まるで自分で道を切り開いてきたかのように錯覚してしまった」

「盲信……」

「未来は見えるはずのないものであることを忘れてしまっていたのだよ。彼女の力は指針ではあるが、人生そのものではなかった。いつの間にか自分の頭で考えることを忘れてしまった。その報いが私ではない者の身に」

「それが、御祖父様の悩みですか？」

訊けば、彼は苦く笑った。

「悩み、というか懺悔だな。これは」

軽く首を振って、

「さあ、私の話はこれで終わりだ」

ばん、と手を叩く。

「次はお前の番だよ。辰史」



明るい声色の中には、微かに後悔が滲んでいた。彼の懺悔がなんの事実を意味しているのかは分からなかったが、辰史は深く探ろうと思わなかった。それ以上、彼のそんな姿を見ていることが辛かったというのもある。辰史は顔を上げて、祖父の目を見つめた。

「……夢を見るんです」

彼がそうしたように、告白する。

「ほう？」

祖父は興味深げに語尾を上げた。その視線に促されるように、先を続ける。

「ずっと、同じ夢を……。ただの夢ではないんです。ぼくにとっては、現実の一部のように思える。

狭い部屋の中。ここでは、女の人が膝を抱えているんです。ぼくは、それをずっと眺めているだけで。その人のためになにかをしたいと思うのに、影が恐くて近寄ることもできない」

沈黙。

祖父は、何故なにも言わないのだろうか？

呆れられてしまったのか——不安になって、辰史は彼に声をかけた。

「御祖母様——」

「辰史、お前は」

彼が、遮るように声を被せてくる。

「お前は、人の未来を視ることがあるかね？」

「未来を？」

辰史は眉を擡めた。その質問は、突拍子もないもののように思えた。

「ありません。夢は見るけど、ぼくには人の未来なんて視えない。大きくなったら、ぼくが勇敢になれるかどうか……もし未来を視ることができのなら、知りたいです」

分からないままに、首を横に振って答える。すると、祖父は何故か険しくしていた顔を緩めた。

そうか、と短い返事が返ってくる。あからさまな安堵にますます、わけの分からない心地で彼の顔を凝視する。こちらの視線に気付いたらしい。彼は、ああと一度頷いて答えた。

「さつきも言った通り、お前の御祖母様は特別な力を持った人だった」

「先見の力のことですか？」

「ああ」

祖父がまた頷く。

「未来に起こり得ることを見通す力だ」

それは今更説明されるまでもないことではあったが——

（違う。御祖母様のことを言っているんじゃない）

あの夢のことを指しているのだ。気付いて、辰史は大きく目を瞠みはった。こちらの胸の内を読んだように、祖父が顎を引く。

「お前も、御祖母様の力を継いでいるのかもしれないと思ったんだよ。夢を夢ではなく、紛まぎれもな

い現実の一部として認識しているからね」

「ぼくにも先見の力があるのでしょうか？」

「いいや。しかし、多少の影響を受けてはいるようだ」

また顎に手を当てて、

「きつと、お前は将来その女の人と会うことになる。夢の中ではなく、この現実で」

と、宣告する。脳がその音を言葉として理解するには、十数秒を要した。彼女は妄想上の存在ではない。夢の中の住人でもない。それは分かっていたことだ。だが、日常という舞台に引きずり出されると話は変わる。

もつと、そう。思念のような。非日常の世界で繋がる存在だとばかり――

動揺に体が震える。辰史は無意識に、体を抱いて蹲っていた。

夢の中でさえ硬直してしまうのに、どうして現実であの化け物と対峙できるだろう。無理だ。自分には無理だ。口の中で何度も呟く。まだ記憶に新しい恐怖と不安に、押し潰されそうだった。知らず、呼吸は速くなっていた。まるで水中に放り込まれたかのように、息ができない。

「落ち着きなさい。落ち着くんた、辰史」

遠のいていく意識を引き戻したのは、祖父の声だった。両手で肩を揺さぶられて、はつと我に返る。顔を上げれば、目の前には落ち着いた祖父の瞳があった。

「ほら、深く息を吸って」

言われたままに、息を吸う。

「吸ったら、吐くんた。ゆっくりとね。大丈夫だから」

声に合わせて呼吸を繰り返すと、次第に気持ちも落ち着いてきた。丸めていた体をゆっくりと起こす。その体勢が夢の中の彼女と似ていることに気付いてしまったせいだろうか。祖父の目に映る自分の顔と、女の顔とが重なって見えた。

「……いつ。いつなんですか。ぼくが、その、彼女と会うのは」

そう訊いたのは、覚悟を決めたからだったのだろうか？

自分でも分からない。が、選ばなければならぬことは知っていた。あの不吉な化け物を現実のものとして受け入れるか、或いはなにも見なかったふりをするのか。化け物だけを夢の中の存在として、彼女の手を取ることなどでははしないのだ。

それは辰史が迫られた、初めての選択だった。

問いかけに、祖父が答える。

「一年、二年――いいや。そんなに近い将来の話ではないのだろう。その夢が救いを求める声だとするなら。お前の人生に影響を及ぼす出会いであるなら。十年。二十年かな。もつと先かもしれない。お前が十分に学んだときに、彼女の方から助けを求めてくるのだろうかね」

「助けられますか、ぼくに」

「ああ」

彼は大きく頷いた。こちらは安堵させるための嘘、というわけではないようだった。誤魔化しているとも思えない顔である。灰色の瞳は誇らしげですらあった。朗々と響く声が、続けてくる。

「助けられるさ。お前は辰の子だ。だからもつと、傲慢になりなさい。傲慢で美しく強い生き物、それが龍だ。お前は私を超える。絶対に、だ」

絶対に、という部分に力を込めて彼は言った。

「傲慢で美しく強い生き物……」

何度が繰り返し返して、言葉を呑み込む。反射的に想像したのは、天を優雅に泳ぐ黒龍だった。その爪や牙は邪悪なものを裂き、天地を轟かせる咆哮は雷を生み出す。力強く生命力に溢れた、巨大な生き物――

（ぼくが、龍になる？ 御祖父様を超える？ 本当に？）

それをそのまま声に出そうとして、辰史は首を振った。疑問をまた、喉の奥へ戻す。

訊くまでもないことだ。三輪尊が絶対と言ったのだから。代わりに肺に溜まった息を吐ききれば、胸の内に残っていた恐怖がいくらか拭えたようにも思えた。

（駄目だ。ぼくが、そうなることを決めないと）

きゅっと拳を握る。どうなることを選ぶかは、もう決まっていた。

「ぼくは……」

言いかけて、いいやと首を振る。ぼく、というのはいかにも弱々しい。

（強くないと。もつと、強く。恐いものなんかなくなるくらい。傲慢で美しく強い生き物に）

口の中で唱えて、視線を上げる。

「俺は、龍になります。彼女のために」

はつきりとした口調で誓えば、祖父はいつものように「そうか」と頷いて笑った。

\*\*\*

目を覚まして視界に飛び込んできたのは、実家の天井ではなかった。自分ももう、幼い子供ではなかった。兄の呼ぶ声が聞こえてくることもない。祖父の姿もない。なにもかもが昔とは違う。けれど彼女が夢の中が存在であることだけが、今も変わることはない。

本を読んでいるうちに眠ってしまったようだ。傍らには読みかけの洋書が無造作に投げられている。読みかけのページを探し出して葉を挟み込むと、辰史は軽く息を吐いた。古書の黴臭い匂いを感じながら、ぼんやりと幼い日に思いを馳せる――

（なんつうか、まあ、夢見がちだったんだよね。子供の頃は）

兄の指摘を不可解な妄想だと反発した少年は、けれど――その兄の言った通り、夢の中の女に恋

していたのだ。なにもない天井に視線を向けて一人、苦笑する。あの当時は、我ながら悲観的だった。周囲に壁を感じて、祖父の他は味方などいないと思っていたのだ。

(いや、今も同じか)

自嘲の形に唇を歪めて、辰史は独りごちた。

あれから……力が開花した後は、確かに姉の言った「特別」であることの恩恵を受けてきたものだ。三輪尊の後継者として、周りからも随分と持ち上げられてきた。

が、一方で家族との関係は寒々しいものだった。両親——特に父親との関係は年々悪化するばかりであったし、二番目の姉とはここ何年も接触していない。兄とは連絡を取り合っているが、仲が良いというわけでもない。今では、そんな風に家庭が歪んでしまった理由も分かる。

三輪家の婿養子となった父は、異能者として一流と呼ぶほどではなかった。大恋愛の末に母と結婚したと聞いているが、一族とはかなり揉めたのだろう。祖父の前ではいつも気後れしている風でもあった。そんな父と祖父の間をなんとか取り持とうとしていたのが、苦勞性の母だった。そこに、尊の才能を継ぐ辰史が生まれたのである。一族も、そして尊も、力を持った辰史の子の誕生を喜んだ。そのことは父の立場をいっそう微妙なものとしたのだった。

すべては力だ。三輪の一族は純粹に力を尊ぶ。

結局のところ兄や姉との気まぐさの理由も、力の差というその事実に尽きた。

姉の卯月が意地悪だったのは、彼女が秋寅の背を見て育ったからだだった。三輪家の跡取りとして

育てられた長兄は、残念ながら才能がなかった。祖父の許で陰陽道を学んだ彼が習得したものと言えば、大して役に立つとも思えない式神を一体、扱う術——ただ、それだけだった。秋寅は薬学に秀でているが、その技能では三輪家を継ぐのに心許ない。

彼らにとつて、自分は少なからず厄介な存在であったのだろう。そんなことを考えながら、辰史は小さく鼻を鳴らした。そうと認めてしまったところで、今更傷付くようなこともない。もう子供ではないのだと呟いて、また思考を例の夢へと戻していく。

夢の中の女。

彼女を助けたいと思う気持ちは、今でも変わらない。

(いや、変わらないどころか……)

自分で否定して、辰史は忘れることのできない女の輪郭を思い描いた。どうしてか。年を重ねるほどに、彼女への執着は増すばかりだった。子供の頃の自分が、彼女こそが運命の人なのだ、決めつけてしまったせいなのかもしれない。誰に心を傾けることもできず、盲目的なまでに彼女との出会いだけを望んでいたのだ。

「俺の運命、か」

そうであつてほしいと、祈るように呟く。

実のところ、辰史は焦っていた。あの日から二十年近い月日が経ち、夢の中の女と同じ年頃にまで成長してしまった。祖父は数年前に他界したが、継いだ店の評判を落とすこともなく稼ぎは上々

である。力もそれなりにある。まだ祖父には敵わないだろうが。  
(御祖父様のようにするには、もう何十年もかかるんだろうな)

口の中で呟いて、軽く肩を竦める。三輪尊という人は異能者として完璧だった。記憶の片隅には彼の懺悔も刻まれているものの、それは人間らしい後悔や失態と呼ぶにはあまりに抽象的で難解な話であった。もしかしたら、怯える孫から悩みを聞き出すために敢えて自分にも後悔がある風を装っていたのかもしれない——と、辰史はそう思う。

「ま、そこは経験と重ねた歳の差なんだろうさ」

今度は声を出して、

「そんなことで悩んでるわけじゃない」

と、苦く毒づく。

準備はどうに整っていた。あとは、彼女だけ。ただ彼女との出会いだけが問題だった。

少年の頃は早く大人になりたいと切望していたが、彼女に出会えないまま年を取り続けていくとは想像したこともなかった。やはり、信じていたのだ。御伽噺の中にしか存在しないような、ご都合主義なまでに運命的な出会いを。

「そのときが来たら、か。せめてあと五年以内には出会えないと厳しいぜ」

眉を寄せる。

「俺がじいさんになった頃に——なんて勘弁願いたいからな。片想いってのは柄じゃないんだ。一

方的に夢を見て、わけも分からないままに惚れて、勝手に王子さまを気取ってたことは認めるぞ。だがな、全部勘違いでした……とか、そんなオチじゃア流石に救いが無いだろうが」

誰に言うでもなく、ぶつぶつとぼやく。

「十にも満たないガキが、見ず知らずの女のために龍になろうと決意したんだ。もしも神様ってやつがいるのなら、そういう俺の健気さに報いてくれてもいいんじゃないか？」

と——その独り言に伝えてくれたわけでもないのだろうが、素っ気ない電子音が割って入った。

電話だ。

少し体を起こして、近くにあるはずの携帯電話を探す。飾り棚の足元に放り出されていたそれを見つけると、辰史は相手の名前を確認した。

蘇芳長春。

大学時代、同じサークルに所属していた知人である。

「久しぶりだな、蘇芳。お前が電話をかけてくるなんて珍しいじゃないか」

なにかあったのか、と訊けば、彼は電話の向こうで少し苦笑したようだった。

「いや、今回はそういう用事じゃない」

「そうか。それなら良かった。たまに連絡を寄越したかと思えば妙なことに巻き込まれてる、ってやつが多くてな。お前は特にそんなタイプだから、そのクチじゃないかと心配した」

蘇芳は寡黙だが、面倒見の良い男だ。加えて——異能者と呼べるほどではないにしろ——思念や

日常から外れた存在を感じ取る力を持っている。そのため、人から相談を持ち込まれることが多い。大学を卒業した後は、そこそこの企業に就職したが、その半端な能力と面倒見の良さのせいでトラブルに巻き込まれることが多かったのだと聞いている。今は仕事をやめて、大学の研究室で恩師の手伝いをしているようだ。

「口の悪さも相変わらずだな」

「この程度なら挨拶みたいなもんだろう？」

で、用事はなんだ——と再び促せば、彼は本題を思い出したらしい。懐かしむような笑いを引こめて、続けてきた。

「いや、用事というほど大層なものじゃないんだ」

「と言うと？」

「新歓コンパの誘いだよ」

新歓と言うとサークルの、だろう。在学中に所属していたテニスサークルだ。二年次の初めに、勧誘の時期にだけ手伝ってくれば良いからと泣きつかれて、仕方なく参加したのである。いや、仕方なくというのは正確ではない。コンパの多い運動系サークルに所属していれば、もしかしたら夢の中の女に出会えるかもしれない、と。そんなことを思いついたためでもあった。

聞いた話によれば——前年度はそこそこ見目の良かった四年生たちが卒業したこともあって——新入生女子の入部が非常に少なかったらしい。餌が必要だったと、まあそういうことなのだろう。

テニスで汗を流すよりも、飲み会を通じて部員同士の交流を深めるサークル。つまりは、そんな場所だった。

「ああ、もうそんな時期か。面倒だな。OBはパスで頼みたいぜ。どうせ、金をたかれてるだけなんだからな」

「そんなこと言わずにたまには顔を出してやれ。卒業してから一度も参加していないじゃないか。あいつらだって、三輪のことを気にかけているんだぞ」

「気にかけて、ねえ？」

そういうものなのだろうか。よく、分からない。首を傾げながら呟けば、電話口からはまた苦笑が聞こえてきた。声には、どこか呆れたような——そんな雰囲気もある。

「他人に対して無関心すぎるんだ、お前は。去年入った後輩の顔も知らないだろう？」  
そう言われてしまえば、否定はできなかった。

大学を卒業してからは、夢で見た黒い獣に通じるものはないかと、仕事の依頼や異変ばかり気にかけてきたのだ。辰史が押し黙ると、蘇芳は「それに……」と珍しく皮肉めいた調子で続けた。

「そろそろ一度くらい参加しておかないと、無駄にハードルが上がるぞ」

「なんだよ、それ」

「在学中にお前が残した武勇伝の数々を、面白可笑しく語るやつもいるからな。卒業後はぱったりと姿を見せなくなった、伝説のOBがいる——なんて後輩たちの間で噂ばかりが先走って、そのう

ち七不思議の一つにでも数えられるんじゃないかと言われている」

「相変わらずくだらねえことで盛り上がってんな。……で、いつだ？」

溜息交じりに訊けば、蘇芳はすぐに答えてきた。

「今週末だ」

「そうか。別に用事もないし、付き合っただけでもいいぜ」

「じゃあ、参加ということで伝えておく。場所と時間はメールの方がいいな」

「ああ」

他に話すこともない。短く領いて通話を切ると、辰史はまた天井を見上げた。

(……まあ、たまには息抜きも良いか)

胸の内では呟いて、また目を瞑る――

\*\*\*

出会いは唐突だった。

少なくとも、辰史にはそう思えた。感覚としては出会いというよりむしろ、予期せぬ遭遇。あれほど望んでいたことであつたのに、いざとなると咄嗟の反応に困ってしまったことも確かだった。

どこにでもある全国チェーンの居酒屋。

大学生が飲み会をするには適当だが、何年も待ち続けた出会いを果たす場所としては些か雰囲気欠けるような気もする。

いくつかに分かれたテーブルの奥。

誰とも話がしにくいその位置に、彼女はひっそりと座っていた。グラスを重ねるわけでもなく、料理に手を伸ばすわけでもなく、自分の存在を主張しようとするわけでもなく――言うなれば、仕方なくそこにいる。極力、目立たないように息を潜めている、そんな印象だった。

どうして、こんな場所に。

何が起こつたのか分からずに、辰史はただ彼女を凝視していた。他のことは視界から消え去ってしまった。その瞬間だけは自分がまるで、あの夢の中にいるようにも思えた。

「三輪さんが来てくれましたー！」

調子の良い後輩の一人が、ピッチャーを片手になにやら周りを盛り上げている。ぼんやりと彼の声を聞きながら、その後輩に小声で訊ねる。

「お、おい。あれは……」

「まずはイツキでお願いします。お手本見せてやってくださいよ」

彼は聞く気がないらしい。なみなみと酒の入ったピッチャーを、こちらの手に握らせてくる。雰囲気を読んだのだろう。辰史のことを直接は知らないはずの後輩たちも手を打って、口々に煽り立てる。

「ウワバミなんですよね」

「三輪さんの飲むとこ見てみたーい！」

「イツキ、イツキ！」

見回せば、他のテーブルでも同期がちらほらと飲まされて盛り上がりを見せているようである。辰史は仕方なしに頷いて、ピッチャーを口元に運んだ。安っぽいアルコールの臭いが鼻に絡みつく。顔を顰めながらぐいと呷って飲み干すと、一同はわっと歓声を上げた。ただ、隅に座ったあの彼女だけは、やはり隣の陰に隠れるようにして控えめに手を叩いていた。

「おい」

空になったピッチャーをテーブルに戻しながら、辰史は今度こそ後輩の耳に囁いた。

「あれ、誰だ？」

「え？」

「一番奥の」

「ああ、比奈ちゃんのことですか？」

こちらの声を聞きつけたらしい。一番手前に座っていた軽薄そうな後輩の一人が、顔をにやつかせながら言った。

「あ、どうも。噂は聞いてますぞ。俺、鳥羽京です。三輪さん、よろしくお願ひしまーっす！」

「ああ」

差し出された手を握る代わりに、丁度目の前にあつたジョッキを渡してやる。鳥羽京と名乗った彼は、苦笑しながらぬるくなったビールを飲み干した。周りはその煽り合いでも思っているのか、また喧しく手を叩いている。もっと飲めと酒を注ごうとする周りを煩がるように、鳥羽はさつと隣に瓶ビールを押しつけて、

「今度は坂内さんが飲んでくれるそうですー！」

と、するりと躲した。程良くテンションの上がっている周囲の興味は、瓶を抱えて苦笑っている坂内へと移っていく。鳥羽は仲間たちを煽るだけ煽ると、盛り上がる彼らを尻目にまたこちらへ向き直った。

「で、三輪さんは比奈ちゃんが気になる感じなんですか？」

その手の話題が好きなのか、悪い顔で訊いてくる。

「比奈、ちゃん……？」

随分と馴れ馴れしい。辰史は頬をひくりと引き皺らせて、訊き返した。鳥羽が軽薄な顔をだらしなく緩めて、頷く。

「ぞ。天月比奈。呼んできますよ。彼女、ちょっと控えめというか。人見知りっぽいんですけど。俺は同じクラスなんで、他のやつらよりは話しますし」

「おいっ」

制止する暇もなく立ち上がった彼が、テーブルの奥へ向かっていく。



「ちよっと後ろ通るぜ」「悪い悪い」「いや、俺も後で飲むから。今はちよっと勘弁して」

烏羽はそんなことを言いながら軽く人を掻き分けて、彼女の許へ辿り着いた。そうして、彼女の――天月比奈の耳に顔を寄せる。

烏羽に耳打ちされた彼女の表情が、少しだけ変わったように見えたのは気のせいだろうか？

驚きか。緊張か。それとも、また別のなにかなのかは分からなかった。

比奈は瞬く間に動揺を消すと、こちらに視線を向けてきた。

予期せぬ遭遇。

夢の中の彼女。

待ち続けていた出会い。

化物のトラウマ。

辰史の頭の中を、さまざまな思いが駆け巡る。何度か目を瞬かせてみても、やはり彼女の姿が視界から消えることはなかった。あまりに――あまりに呆気ないような、信じ難いような、複雑な心地で見つめ合って、ふと違和感に気付いた。

「あ……」

（赤く、ない……？）

辰史は軽く眉を顰めた。赤くない。視線の先では鳶色の瞳が、控えめに笑んでいる。もしかしたら、コンタクトレンズでも入れているのかもしれない。視線を逸らすこともできず、しばらく互い

に顔を凝視する。比奈は軽く頭を下げると、烏羽に押されるようにして進んできた。

「初めまして。ええと、三輪さん？」

「三輪辰史だ」

「よろしく願います。私は――」

「天月比奈、だろうか？」

他愛ない挨拶ももどかしい。急<sup>ま</sup>くように言えば、彼女は驚いたように目を瞠<sup>ま</sup>った。

「そう、ですけど。どうして？」

「烏羽から聞いた」

「烏羽くんから」

心なしか困惑したように、比奈。

「そういえば私に用事だつて聞いたんですけど……」

と。言いかけた彼女を遮ったのは、背後から伸びてきた腕だった。

「おいおい、天月。新歓の席でOBとぼつか絡んでんじゃねえよ。新入生も構ってやれって」

「ていうか、比奈ってば全然飲んでないじゃん。最初の一杯だけ？　ちよっと店員さん、カシ

スオレンジ一つ！」

「どうせだったら、三輪さんとダブルでイッキ頼むよ。ほら、後輩に良いところ見せたげて」

もう大分酔っぱらっているらしい。

「この酔っぱらいどもが」

一同を眺め回して、辰史は小さく毒づいた。とりあえずテーブルに二人分よりもう少し多めの参加費を叩き付けて、比奈の腕を掴む。

「さっきで酔ったみたいだ。気分が悪いから外に出てくる」

「あれれー、なんで天月連れて行くんですかー。露骨に天月狙いですか、三輪さん」

「他に俺のこと介抱かいほうできるやつ、いるか？ こいつ以外はみんな酔っぱらいじゃねえか」

「そんなこと言つて、ピッチャー一杯で気分悪くなるほど弱くないでしょう。追いコンのときの武勇伝、聞いてるんですからねー。全員潰して、それでもまだ一人涼しい顔して飲み続けてたって」

「それは二年前の話だからな。今は馬鹿みたいな飲み方したら明日に響くんだよ」

苦い顔で言い返して、店を出る。そのまま当てもなく駅の方へ歩き続けて、しばらく――

「あの、三輪さん」

沈黙を破るように声をかけてきたのは、比奈だった。

「うん？」

振り返る。

「手……」

困ったような彼女の視線が、繋いだ手に注がれていた。

「ああ。歩きにくかったか？ 悪いな。このあたりは人も多いし、はぐれても困ると思つて」

「困る？ どうして」

驚いた顔をして、そんなことを訊いてくる。不可解な問いかけだった。辰史は眉を不均衡につり上げて、逆に訊き返した。

「どうして……話の途中だっただろう？ 用事、知りたがつていたじゃないか」

「それは、そうですね。でも、用事？ あ、介抱ですか？ すみません、気付かなくて。コンビニでお茶でも買って来ますね。駅の方に休める場所もあつたはずなので。あ、さっきのお金も」

「いや、あれは口実。酔うほど飲んでねえし。金も別にいいし。ていうか、そうじゃなくて――」  
なにかから説明したものか。

「お前と話がしたかった」

言葉に迷いつつも告げれば、今度は比奈の顔が怪訝けげんになった。

「話、ですか？」

呟く――その表情は思索しているというより、なにかを思い出そうとしているようにも見える。ややあつて、彼女ははっと顔を上げた。唇が僅わずかかに動く。声には出さずに、三輪さんと言ったようにも見えた。

「もしかして……」

「あ。言つておくが、ナンパでもないからな。軽い気持ちじゃねえし」

一応、釘くぎを刺しておく。けれど、比奈にはこちらの声など聞こえていない風でもあつた。彼女の

方こそ酒気に当てられてしまったように、街灯りに照らされた顔は酷く青ざめていた。

「三輪さん。三輪辰史さん」

もしや彼女の身にも、この出会いを予感させるようななにかがあったのだろうか？

ほんの少しの期待を込めて、辰史は頷いた。

「あ、ああ。そうだ」

「異能者の……三輪家の後継者、ですよね？」

比奈がぎこちない声で問いを重ねてくる。

「は……？」

彼女がそれを知っているとは、予想外だった。

「あ、サークルのやつらから聞いたのか？」

予想外だが——考えてみればとりわけ不自然というほどのことではない。少しだけがつかりしながら訊けば、比奈は小さく首を振った。

「いえ。あの家でも有名だったので」

色を失った唇を震わせながら、答えてくる。

（あの家？ どこだ？ 天月……そうある名字じゃないが……）

少し考えて、

（天月……天……異能者……）

辰史はようやく思い出した。

「あれか。天月って、高天の」

「まあ、そういうことです」

返事がどうにも歯切れ悪く聞こえるのは、気のせいではないのだろう。

「悪い。高天家にはあまり詳しくないんだ。交流は親父や一族の連中に任せていたし、なんとなく勝手に閉鎖的な一族なんだと——」

慌てて弁解する。しかし、彼女は「いえ」と短く呟いて顔を俯けた。

「詳しくないならいいんです。てつきり、知っていて連れ出したのかと思っただけなので」

「そうじゃない。家のことなんか関係ない。全然、知らなかった。あ、それも失礼な話だが……」

「気にしないでください。それに、閉鎖的な一族だということの間違いではないです」

言って、比奈はほっとしたように笑った。

「正直、安心しました。私も本家とは繋がりがありませんので、家の話題になっても知らないことの方が多いいんです。だから、三輪さんをつかりさせてしまったら申し訳ないなど」

天月は高天一族の中で、それほど地位のある家ではないのだろう。宗家から離れば離れるほど、情報が入ってこなくなるというのほどこも同じようだ。

「ああ、それなら心配しなくてもいい。俺の訊きたいことは別にあるんだ」

「なんででしょう？ サークルのことですか？ それなら私より烏羽くんの方が……」

「いや。お前のこと」

ゆるゆると息を吐き出す比奈を遮って、告げる。と――

「え？」

弛緩しかけた彼女の顔が、またぎくりと強張った。まるで静止した時間の中にもいるかのよう  
に、息を止めて。ゆっくりと隣きすると、比奈は瞳をこちらへ向けてきた。鳶色の瞳には疑念と緊  
張が走っている。やがて彼女は少し息を吸って――

「私のこと、ですか？」

「そうだ」

「……三輪さんは、私のことをどこまで知っているんです？」

慎重に問いを投げかけてきた。

「どこまでと言われても――」

問いかげがああ夢を指しているわけではないことが、すぐに分かった。さつきから微妙に食い違  
う会話が、それを示している。彼女はなにかを警戒していた。

そのことに気付かなかったのは、舞い上がりすぎていたせいなのだろう。辰史は初めて冷静になっ  
て、一度深く息を吸った。

「なにも。なにも、知らない」

肺に溜まった息を吐き出しながら、そう認める。

知っているのは、夢に見た女と目の前の彼女がなんらかの問題とともにあるということだけだ。

他はなにも知らない。言葉にしてしまえば、気分はいくらか落ち着いた。

「……お前は、俺のことをどこまで知っているんだ？ 知られたくないことでもあったのか？」

夢の話をしようかしまいか――迷った末に、辰史は逆に訊き返した。比奈が答える。

「三輪家の後継者だということを、知っています。一族の中でも特に才能に秀でていた、三輪尊さ  
んの寵児だと聞きました。そんな方がどうして私のことを知りたがるのか、腑に落ちないんです。  
さつきも言った通り、天月は高天の傍流。高天の中でさえ取るに足らない存在だったのに、まして  
他の異能者からこうして興味を持たれることなんて……」

「だから、家のことは関係ないんだ。俺個人がお前に興味を持っているというだけで――」

「三輪さん個人が？ どうしてですか？」

ますます困惑したように、比奈。

「それは」

（こんな妙なタイミングで、夢で見たからなんて言えねえだろ）

良くも悪くも有名な三輪の名前を恨めしく思いながら、辰史は苦く息を吐いた。

「その、後輩だし。さつきも見た感じ、あまり楽しくなさそうに見えたから。気になってだな……」  
言えば、いくらかは思い当たる節があったらしい。

「あ――す、すみません。私、飲み会ってあまり参加したことなくて。今回は新歓だからどうして

もと言われたので来てみたんですけど、お酒も飲めないのです。やっぱり浮いていましたよね」  
嘆息しながら、申し訳なきように続けてくる。

「心配してくれたんですか。私、三輪さんが異能者だと分かったら身構えちゃって……ごめんなさ  
る」

「いや、いいんだ。俺も言葉が足りなかった。それで——」

一度言葉を切って、辰史は比奈の表情を眺めた。

彼女が異能者に対して身構える理由は分からない。が、一つだけはっきりしたこともある。

「なにか、悩みがあるんじゃないのか？」

悩みというよりは、恐れか。比奈は頬の筋肉をびくりと動かした。

その肩を掴みなくなる衝動を抑えて、辰史は続ける。

「突然こんなことを言われて戸惑うかもしれないが、できることなら相談して欲しいと思ってる。  
同じ異能者だからってわけじゃないし、お前が心配しているような含みがあるわけでもない。俺は、  
お前の力になりたいだけなんだ」

「……ありがとうございます」

長い沈黙の末に、比奈はぼつりとそう零した。

「三輪さんがそう言ってくれたこと、嬉しいです。すぐ。そのことだけは分かってください」

「ああ」

「でも、その……大丈夫なので」

それ以上を言う気はないのだろう。比奈はそれきり口を噤んで、ふいと横を向いた。街灯に照ら  
された地面には、彼女の濃い影が伸びている。もちろん、それは人の姿をしていた。

「そうか」

辰史はひとまず引き下がることにした。納得したわけではない。が、こちらも事情を話していな  
い以上、信頼されないのは仕方ないことだった。

「なにかあったら、いつでも連絡してくれ」

代わりに、名刺を差し出す。祖父の店を継いだときに作ったものだ。報復屋の字は入れようか迷っ  
たが、結局まだ蛟堂としか記していない。彼女はそれを受け取って、首を傾げた。

「蛟堂……？」

「ああ。俺の店なんだ。暇なときに来てくれても構わないぜ。むしろ大歓迎ってやつだ」  
わざとらしく片目を瞑ってみせれば、比奈は少しだけ笑った。

それから、沈黙。他に話題にできるようなこともなく——また、固く唇を結んだ彼女はそれ以上  
の会話を避けているようにも見えた。気まずい静寂に包まれたまま、駅までの道を歩く。

「……………？」

五分ほど歩いてようやく。人の多い駅に辿り着いたとき、不意に感じた悪寒に辰史は眉を顰めた。  
薄ら寒い感覚が、背筋を逆撫でしている。

「あの、さ。比奈」

声をかける。と、鞆かぼんの中に手を入れて財布を探していた比奈が、手を止めて視線を向けてきた。

「はい？」

「家まで送ろうか？　なんか嫌な予感がするんだ」

目に見えないなにかがいる。どこからか見られているような気がする。手足に絡みつく悪意を纏まとった気配に、辰史は両腕を擦さすった。この悪意は自分だけに向けられているのだろうか？

じつと比奈を凝視すれば、彼女はなにも気付いていない風に軽く笑った。

「ここまでで大丈夫ですよ。送ってくださいあってありがとうございます。それと——」

そこで、おもむろに声をひそめる。

「三輪さんこそ、気をつけて。帰りは人の多い道を歩いてください。人気がない道を通るくらいなら、タクシーを使った方がいいと思います。危ないので」

「心配してくれるのか？」

それにしては大袈裟おおげさだと思いつながら訊き返す。比奈は思索するように一度だけ目を瞑った。

「心配……。いえ、やめておきます。私が心配すると、ろくなことにならないんです」

意味ありげに言って、改札をくぐっていく。彼女の姿が完全に見えなくなると、辰史はくると踵かかとを返して夜の街へ引き返した。頭の中が、軽く混乱している。

(どうということだ？)

予定外のことばかりだった。比奈のことも、そしてまだ手足に纏わり付いている気配も。

(腑に落ちない……というか、拍子抜けだ。泣いているものとはかり、思っていたからな)

遠慮がちな彼女の顔を思い出しながら、人通りのない小路へ足を向ける。

(そもそも、向こうから助けを求めてきているわけでもないってのが問題なんだよな。俺が必死になればなるほど、あいつは警戒するだろうし。どうしたものか……)

大通りから離れること、二百メートルほど。無音と言うわけではないが、人の声は遠い。辰史は周囲に人がいないことを確認すると、その場で足を止めた。

「で、用件はなんだ？　わざわざ人のいない道を選んでやったんだ。手短かに頼むぜ」

どこにいても分らない、見えないなにかに声をかける。

と、不意に街灯の明かりがジジ……と音を立てて小さく揺らめいた、気がした。

「屍……！」

先手必勝と言わんばかりに式符を放り、闇夜に短く叫ぶ。独眼の鴉かみすが宙で翼を広げるが早いか、あたりに一陣の黒風が吹き荒れた。それは屍喰かばねくいが巻き起こしたのではない。

「なんだっ!？」

なにが起こったというのだろうか？

耳元で生じた鋭い唸りに、思わず顔を手で庇かばう。

風が過ぎ去ったあと、アスファルトの上にはずたずたに裂かれた屍喰の式符が散らばっていた。

悪意を含んだあの気配は、もう感じられない。

ありえないことだ。

辰史は呆然と呟いた。屍喰の能力はどちらかといえば偵察型であるが、決して弱くはない。相手が何者かも分からないまま裂かれるなど、信じられないことだった。

——「三輪さんこそ、気をつけて。帰りは人の多い道を歩いてください」

比奈の忠告が脳裏を過ぎる。黒風。黒。夢の中で見た黒い影と関係があるのか、否か……

「なんだってんだ？」

訳が分からない。彼女はなにを知っているのだろうか？

\*\*\*

「珍しいな。お前が二日続けて連絡を寄越すとは。暇なのか？」

翌日——

電話をかけてきたのは天月比奈ではなく、蘇芳長春だった。

そういえば、昨晩は話もせずに帰ってきてしまった——と、思い出しながら通話に出る。彼の方は、こちらの不義理など慣れているといった風で、特に責める様子はなかった。

「いや、暇ではない。少し相談に乗ってもらいたいことがあったんだが、生憎昨日はお前が早々に

帰ってしまったからな。どこにもいないと思ったら、二年の女を持ち帰っているとは……」

「持ち帰ってねえよ。馬鹿なこと言うな」

「そうなのか？」

「なんかワケ有りに見えたからな。先輩として少し相談に乗ってやろうと思っただけさ」

本音ではないが、おかしいことを言っただけでもなかった。

「有償で？ 後輩をカモったのか？」

が、蘇芳はぎよつとしたように、そう訊いてきた。なんとなく——彼の言っている意味に気付いてしまつて、辰史は額を押さえた。知人にさえ、いや知人だからこそ信用がないのか。

「なんでそうなる！ 無償だ。完全なる善意だぞ」

うんざりと言いつ返せば、蘇芳はますます訝つたようだった。

「……三輪。お前、自分がなにを口にしたか分かっているのか？」

「はあ？」

「金の亡者で面倒見も良くないお前が、無償で、しかも善意で後輩の相談に乗るなんて信じられるか。それとも、会わない間に少しは丸くなったのか？」

分かつてはいたが、酷い言われようである。

「あのな、俺だつて人に親切にしたいくなることくらいある」

「……それは知らなかったな。そうか。三輪でも人に親切にしたいことがあるのか」

余程衝撃的だったのか、蘇芳はぶつぶつと呟いている。そのまま意外に思うようなことだろうか、と辰史は首を傾げながら続ける。

「ま、それは冗談として。いろいろ片付いたら、事情くらいは教えてやるよ」  
で、お前の方の相談は？」と。

「機嫌は悪くないから、内容によってはタダで片付けてやってもいいぜ」

「内容によっては、か。まあ、その方がお前らしくて安心できるな」

「……俺は今、唐突に相場の十倍くらいふっかけてやりたい気分になったぞ。おい」

「それで、相談なんだが」

こちらの言葉をさらりと無視して、蘇芳は切り出してきた。

「うちのサークルの二年に、烏羽京というやつがいてな」

「ああ、知ってる。昨日、少し話したからな」

比奈と同じクラスだと言っていたか——前髪にメッシュを入れて、やたらと耳に穴を開けていた軽薄な後輩。その派手な顔を思い浮かべるのは、難しいことではなかった。答えると、蘇芳はそうかと頷いた。

「その京から聞いた話なんだが……」

「ああ」

「大学で、妙な事件が起きているらしい」

妙な事件、とはまた大雑把おおざっぱな言い方をする。

「まさか、試験前に教授の研究室から問題用紙が盗まれたとか——その手の話じゃないだろうか？  
そういうのはもうごめんだぞ。俺は、何でも屋じゃアねえんだ」

昔のことを思い出しながら言えば、蘇芳は苦笑したようだった。

「いや、そうじゃない」

否定して、また続けてくる。

「もっと不穏な話だ。夜道を一人で歩いているやつが、正体不明のなにかに襲われる。それも、ほとんどがうちの大学の学生らしい。サークルの連中も何人かやられたと聞いている。被害者の一人が通報して、警察が通り魔の線で巡回をしているそうだが……」

「ああ——そういうことか」

——「三輪さんこそ、気をつけて。帰りは人の多い道を歩いてください」

比奈の言葉を思い出して、納得する。

大学内で起こっている事件なら、彼女が知っているのも当然だろう。彼女の忠告に深い意味がなかったことを知って、辰史はほっと安堵の息を吐いた。

「それなら、俺も昨日遭遇した」

「なんだと？」

「比奈と別れてから、一人のところを襲われてな。あれは通り魔ではないと思っぜ」



絡みつく気配。ぞわりとした黒風の感覚を思い出しながら告げる。と、蘇芳も続けて肯定した。「だろうな。京のやつも人間の仕業ではないと踏んでいる。異能者というほどではないが、あいつも思念が見えるんだ。あの見た目通り——と言ったら怒られるだろうが、浮ついたやつでな。妙なトラブルに巻き込まれることも多い。そういう事件に関しては、俺よりも鼻が利くと思う」

「ほう？ それで、お前たちは俺になにを頼みたいんだ？」

「手を貸して欲しいんだ。俺と京は元凶を探そうかと思っている。これ以上、被害を増やすわけにもいかないからな。だが、俺たちだけでは心許ない。相手が思念かどうかも分からないし、思念だったところで俺たちの力がどこまで通用するかも分からない……頼めるか？」

烏羽は異能者と言うほどではない。蘇芳はそう言ったが、そういう意味では彼も似たようなものである。

「ああ、いいぜ。こっちにとっても好都合だ」

辰史が頷くと、蘇芳は驚いたように訊き返してきた。

「好都合？ 事件について、なにか心当たりでもあるのか？」

「心当たりがあるわけじゃないが、式神が一体やられたからな。それに……」

大学の構内で聞き込みをすれば、天月比奈にも会えるだろう——と、その言葉は呑み込む。

「いや、なんでもない。借りは返す主義なんだ」

「そうだな。お前は、そういうやつだったな」

「当然だ。もし犯人が異能者なら、慰謝料を請求してやる。そういうわけで、俺も明日から調査を始めようと思うんだが……お前たちはどうするつもりだ？」

こちらはこちらで勝手に動いても良いものか、それとも彼らに合わせるべきか。考えながら、訊く。携帯の向こうにしばしの沈黙が流れたのは、彼もどうすべきか思索していたからなのだろう。

ややあつて、蘇芳がゆっくりと答えた。

「まずは襲われた学生と接触してみようと思っている。幸いと言っていいのかは分からないが、それほど大きな怪我をした者はいないらしい」

「襲われた連中の身元が分かるのか？」

「ああ。警察からの連絡を受けて、大学側が調査アンケートを取ったと訊いていてな。それをどうにか手に入れようと思っている」

「そうか。それなら学長に頼んだ方が早い」

学長は祖父と懇意の仲だった。亡き祖父の名前を使うのは気が引けるが、利用できるものはなんでも利用するのが三輪家のやり方でもある。

「まあ、そのあたりのことは俺に任せろ。とりあえず今からアポ取って、話をしてみる。お前らと合流するのは、そうだな……明日の昼にラウンジでいいか？」

「分かった。頼むぞ」

電話の向こうで答える蘇芳に、それと——と、もう一つ付け加える。

「烏羽京のクラスと明日の必修科目を訊いておいてくれないか？」

「あ？ ああ。それは構わないが……何故だ？」

不可解そうに、蘇芳。辰史は意味ありげに笑った。

「こつちにもいろいろと事情があつてな。今回のこととは関係がないから、気にするな」

「なんのことか分からないが、お前がそう言うのなら気にしない方がいいんだろうな。じゃあ、また明日」

溜息とともに通話が切れる。

辰史は携帯をぱちんと折り畳んで、立ち上がった。飾り棚の引き出しを探つて、祖父の電話帳を探す。黒い革製の装丁に銀の留め具が取り付けられたそれは、すぐ見つかる場所にあつた。開けば、祖父と付き合ひのあつた人物の名前がずらりと記されている。

「さて。面倒な事件はさつさと片付けてしまふに限るな」

目当ての名前を探しながら、呟く。ほんの少しの期待を含んだその声は、他に聞く者のいない静寂の中に溶けて消えた。

\*\*\*

皇明館大学――

その校舎が東京に造られてから、百余年が経つ。それは大学というよりは巨大ビルディングといった佇まいである。古い歴史のわりに近代的なのは、百周年の前後に大規模な改装工事をしたからだと聞いている。文学部、教育学部、社会学部、経済学部、法学部といった従来の学部の他に、教育学部という奇妙な学部が設立されているのも、この大学の特徴だろう。件の学部は、日本神学科、外国神学科、特殊神学科に分けられ、国内外の神学研究および異能者たちの育成に携わっている。一般的な知名度はそれほど高くない。が、この分野における日本でただ一つの教育機関である。

教育神学科の生徒の多くが、異能者の一族に生まれた者である。彼らは、従来の学部を卒業する生徒が一般企業へ就職するのは対照的に、ほとんどが実家に戻つて家業を継いでいるようである。中には研究機関に就いて、思念や古くから存在する特殊な秘術――たとえば陰陽道や修験道、古代日本においては怨霊と呼ばれてきた呪術、その呪術から都市を守るために環境を整える風水術といった、一見すると胡散臭く思えるような分野の研究解明に従事する者もいる。

ただ、特殊神学科には、異能者の血など関係なしに思念が視えてしまう者も在籍している。そうした学生は、それぞれが持つ潜在能力を正しく把握するための検査も行う。結果次第で一般人として一般企業に就職するか、或いは異能者を相手にした特殊な企業に就職するかを決めるのである。

烏羽と比奈も、特殊神学科に在籍している。烏羽の方は異能者の血は継いではいないが、思念視に加えて人より第六感が優れているようである。比奈は――

(異能者じゃないと言っていたが……まあ、高天一族と言えばこの世界では有名すぎるほど有名だからな。特神<sup>トクノカミ</sup>を選ぶのが無難だろうさ)

大教室の前で壁に背を預け、辰史はじつと腕時計を凝視していた。朝一番で学長室へ足を運び、すでに例の被害者リストは受け取っている。蘇芳たちとの待ち合わせにはまだ余裕があった。今はもう一つの目的のために、ある人物を待っているところである。

「そろそろ、か……」

呷く。と同時に、俄に部屋の中が騒がしくなった。講義が終わったのだろう。入り口からは学生達がぞろぞろと出てくる——その中に彼女の姿を見つけて、辰史は声をかけた。

「よう。二日ぶり、か？」

「三輪さん——」

こちらを向いた彼女——天月比奈の瞳が大きくなる。

「こんにちは。今日はどうしたんですか？」

「烏羽に少し用事があったな」

「烏羽くんなら、まだ中にいたと思いますけど。呼んで来ましようか」

言うが早いか教室の中に引き返そうとする彼女を、辰史は慌てて引き留めた。

「いや、あいつとは昼にラウンジで合流することになってるから」

「はあ……」

「このあと講義がないなら、少し話さないか？」

訊くまでもなく、このあとの必修講義が休講になっていることは知っていた。

無言で様子を窺う。少し躊躇った風ではあったが、やがて比奈は観念したように頷いた。

「はい。じゃあ、私も昼はいつもラウンジで食べてるので、そこに行きましょう」

「ああ」

少し強引だったかもしれない。警戒している様子 of 彼女にそう思ったが、今更かと開き直すことにする。辰史は歩きながら、改めて彼女の顔を眺めた。

一昨日は動揺していたこともあって、実感している余裕もなかったが、こうして明るい場所で確認すると、言葉では表しがたい感慨が胸を満たした。幼い少年が、御伽噺の王子のように口付けることを望んだ唇。白い肌も、頬に影を落とす長い睫毛も、鬚<sup>かみ</sup>りを帯びた眼差しでさえ——その瞳の色<sup>いろ</sup>の他は——夢で見たままだった。

欲しいものを目の前にした子供のように、思わず手を伸ばしそうになって、押し止める<sup>とど</sup>。

(まだだ。どんな物語でも、結ばれるのは問題を解決したあとだと決まってるだろうが)

そう自分に言い聞かせ、気まづげな比奈の隣を無言で歩く。なにも知らない彼女にしてみれば、訳の分からない状況だろう。二日経って、辰史もようやくそのことを自覚し始めていた。

(下手すりゃ不審者扱いされてるって、分かってないわけじゃアないんだけどな……)

溜息を呑み込みながら、ラウンジの硝子<sup>ガラス</sup>扉を押す。昼まではまだ一時間ほど時間があるせいか、

学生の姿はまばらだった。ぐるりと中を見渡してみたが、蘇芳の姿もない。

適当に奥の椅子を選んで腰掛ける。比奈は荷物を置き、

「ちよつと待っていてください」

と、入り口の自販機でコーヒーを二つ買って、戻ってきた。

「昨日は結局、私の分まで払わせてしまったので」

「気にすることじゃない。つうか、気を遣わせたなら悪かった。サークルのOB、三輪家の跡継ぎ——どちらにせよ、良く知りもしない男からいきなり奢られたら気後れするよな」

反省の体を装って、軽く引いてみる。彼女は驚いたようだった。

「あ、いえ。そんな風に謝らないでください。私の言い方がまずかったですけど……あの、気を遣ったわけではなくて、お礼のつもりなんです。駅まで送ってもらいましたし。あの後に先輩たちから聞いた話とは随分違っていたので、少し気後れしたというのも事実なんですけど」

余程焦ったのか、早口に言って、しまったと顔を引き攣らせる。

「あ、すみません。一昨日から失礼なことばかりで……」

「別にいいさ。どうせあいつら、俺のことを守銭奴だとか拝金主義者だとか、金の亡者だとか、借りを作れば倍返しとか言ってやがったんだろう？ 不本意ではあるが、間違っちゃアいないな」

答えれば、比奈は返事に困ったのだらう。なにも言わずに、ただ首を横に振った。

控えめではあるが、それは否定の意思表示だった。

ただそれだけのことがどうしようもなく嬉しくて、緩みそうになる口元を手で覆う。浮つきそうになる声をどうにか抑えながら、辰史は本題を思い出して話題を変えた。

「そういえば——」

「はい」

「あれから、少し調べた。高天つて白狐憑きの家系なんだな」

「ええ、まあ。知らなかったんですか？」

比奈が疑わしげな目で、訊き返してくる。それは、当然といえば当然の反応なのだろう。高天家は、異能者の間では知らない者のない一族である。繁栄の歴史は三輪家よりもずっと古い。稲荷神を信仰している関係から、裏伏見とも呼ばれている。

そんな高天一族特有の能力が、狐憑き——そこまでは、辰史もどうにか知っていた。

「ああ。憑き物の家系だということは聞いていたんだが……」

他の一族には興味がなかった。その一言は呑み込む。辰史は、特に高天のような古めかしい因習と一族の血に縛られた家のことは、知ったところで意味がないと思っっている。

(だって、向こうに外の世界と付き合っていく気がないんだからな)

そんなことを言い訳がましく口の中で呟く。

「そうですね。知っていたところで得するようないでもないでしょうし」

比奈がぼそりとそう言った。まるで胸の内を読まれたように錯覚して、返事に詰まる。が、考え